

用語説明

《アニマルスロ - プ》

谷戸沢処分場管理道路沿いは、外周水路が設置されている。この水路に転落したキツネなどが安全に林内へ戻ることができるように設置した避難路。モニタリング調査では、アニマルスロ - プを利用しているアナグマやタヌキなどが確認されている。

《逸出種^{いつしゅつしゅ}》

植物種の来歴(由来)を区分するとき用いる言葉。外国から日本に入ってきて食物生産や栽培などの途中で逃げ出してしまった結果、国内で生育するようになった種を「逸出種」といい、意図的に植えて繁殖させている種を「植栽種」という。

《茅場^{かやば}》

昔の木造住宅の屋根材として利用されていた茅(ススキ)が生えている場所。住宅建築や屋根の葺き替えなどに利用するため集落近くに存在していたススキ草地。

《環境指標性生物^{かんきょうしひょうせい}》

対象とする場所の環境状況を良く表していると考えられる生物種。種が棲息するために必要となる環境条件などが既存のデ - タの集積により明らかとなっている種などで、昆虫類であればチョウ類やトンボ類などがそれにあたる。

《環境省レッドデ - タリスト》

野生生物を保全するため、絶滅のおそれのある種の状況を的確に把握し、その状況について理解を広めることを目的に、環境省が作成した日本の絶滅のおそれのある野生生物種のリスト。リストを基にレッドデ - タブックを刊行している。絶滅危惧種参照

《間伐^{かんばつ}》

スギやヒノキの人工林において良材を得るために実施する森林施業であり、植林から主伐までの間に育林の状況にあわせて実施する伐採のこと。間伐や枝打ちなどの施業が行われている林地は、林床に陽光が入りやすく林床植生も豊かとなる。



アニマルスロ - プを利用するキツネ

《けもの道》

林内に棲息する哺乳類などが移動に利用している通路。谷戸沢では、森林ゾーンや外周道路沿いの斜面などでみることができる。

《しんりゃくてきがいらいしゅ 侵略的外来種》

外来生物のなかでも特に侵入先の自然環境に大きな影響を与え、生物の多様性を脅かすおそれがあるとされている種。アライグマやウシガエル、オオクチバスなどがその代表。

《じゅもくかつりよくだちようさ 樹木活力度調査》

街路樹などの生育状態を調べるために科学技術庁資源調査会が示した「樹木活力度評価基準」により樹勢や樹形、枝の伸長量などの状態から樹木の状態を4段階に評価する方法

《せいいたいけい 生態系》

植物などの有機的な要素と、土砂などの無機的な要素で構成された外部と異なった環境が成立している森林などで、その中核となる植物(生産者)と動物(消費者)並びに土壌中の微生物(分解者)などのつながりを意味する。

《ぜつめつきぐしゅ 絶滅危惧種》

絶滅の危機にある生物種のこと。環境省レッドデータブックでは、絶滅のおそれのある種を「絶滅危惧 A類(CR)」、「準絶滅危惧(NT)」など絶滅の危険性の程度により区分している。

「絶滅(EX)」	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
「野生絶滅(EW)」	飼育・栽培下でのみ存続している種
「絶滅危惧I類(CR+EN)」	絶滅の危機に瀕している種
「絶滅危惧IA類(CR)」	ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種
「絶滅危惧IB類(EN)」	IA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
「絶滅危惧II類(VU)」	絶滅の危険が増大している種
「準絶滅危惧(NT)」	現時点では絶滅危険度は小さいが、生棲条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
「情報不足(DD)」	評価するだけの情報が不足している種
「絶滅のおそれのある地域個体群(LP)」	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

《 ゼフィルス種 》

樹林性のシジミチョウ科の一群のこと。日本には 20 種程度が棲息している。主にコナラなどを食樹とする。

《 特定外来生物 とくていがいらいせいぶつ 》

生態系に影響を及ぼすなどのおそれがある外来生物による被害を防止することを目的として、平成 16 年に制定した「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により指定された生物。

《 二次林 にじりん 》

自然の状態で成立していた森林などが人為的若しくは、台風や山火事などの自然的攪乱を受け代償的な林地となった状態のこと。薪炭林などとして利用されていたコナラ林などがその代表的なもの

《 農用薪炭林 のうようしんたんりん 》

農業に必要な腐葉土などの堆肥や煮炊きに必要な薪炭材を得るために手入れされていたクヌギやコナラが主体の落葉樹林。多摩地域では 15～20 年程の間隔で伐採を繰り返していた。

《 風媒花 ふうばいか 》

風により花粉を飛ばす花を咲かせる植物。これに対し、ミツバチなどの昆虫を利用して花粉を運ばせるものを「虫媒花」と言う。

《 ビオト - プ 》

ビオト - プは、生物(bio)と場所(tope)から作られた造語で、生物の生棲する空間(場所)などと訳されている。谷戸沢処分場では清流復活用貯水池の一部を利用して湿地ビオト - プを造り、野生生物と共生するための空間を設定している。湿地ビオト - プではモリアオガエルなどがみられる。

《 被度・群度 ひど ぐんど 》

植生調査で使用する植物の生育状態を調べる方法の一つ。調査対象とする区画内における対象種の優占する割合を 5 段階に分けて表す方法を被度と言い、生育する植物の数量の程度を 5 段階に分けて表示するものを群度と言う。

《 萌芽更新 ほうがかうしん 》

農用林や薪炭林の手入れに用いられた手法で、伐採した切り株から生じた萌芽枝を利用し、次世代へ更新するもの。堅果(果実)を利用する実生更新と比較して生育が早いため伐採期間を短縮できる。

《 ^{まつが ひがい}松枯れ被害 《

輸入材などと一緒に国内に侵入し、分布を広げているマツノマダラカミキリとマツノザイセンチュウによる松枯れ被害。マツノマダラカミキリに寄生したマツノザイセンチュウがアカマツなどに侵入すると樹木の養分や水分を供給する機能を阻害し、枯らしてしまう。マツノザイセンチュウが枯らしたマツでマツノマダラカミキリは繁殖する。

《マント植生》

樹林の縁を好んで生育する植物のこと。防寒用などで羽織るマントのように樹林の周りを囲むことから呼ばれる。

《卵のう》

卵が多数入っている袋のこと。サンショウウオは、透明なクロワッサンのような形状をした袋を1対産卵する。1対の卵のうの中には、60～70個程度の卵が入っている。 p18 参照

《ベイトトラップ》

ベイト(誘引物)を入れたプラスチック容器を地中に埋設し、オサムシなどの地上を徘徊する昆虫類を捕まえる罠のこと。同様にライト(光)トラップは、光に集まる正の走行性を持つ蛾などの昆虫種を集める罠のこと。

《 ^{りんかん}林冠 《

樹林で優占種となる高木類が枝葉を伸ばしている最上部の層。地面は林床という。

25年間の生き物の移り変わり

～ 処分場事業と動植物の変遷 ～

日の出町谷戸沢廃棄物広域処分場における動植物の変遷に関する調査報告書

平成22年3月発行

編集・発行 東京たま広域資源循環組合

〒183-0052 東京都府中市新町2-77-1(東京自治会館内)

Tel 042(385)5947 Fax 042(384)8449

ホ - ムペ - ジ <http://www.tama-junkankumiai.com/>

調査機関 株式会社ジェプロ・フォーラム

〒113-0033 東京都文京区本郷4丁目4-25-8猪尾ビル

Tel 03(3814)6471 Fax 03(3814)6472

ホ - ムペ - ジ <http://www.jepro.net/>